

どうやって 授業をつくる？

いよいよ小学校外国語活動・外国語科の移行期間が始まりました。授業のつくり方に試行錯誤されている方も多いのではないのでしょうか。本特集では、担任の先生が中心になってつくる英語の授業について取り上げます。長年にわたり小学校英語活動をリードしてきた、東仁美先生へのインタビューと、実際の授業事例をもとに、担任の先生だからこそできることは何なのか考えていきます。

撮影：鈴木俊介



学級担任が授業をつくる意義って？

小学校での外国語教科化に、学級担任は、学校は、どう対応したらよいのか。東仁美先生に、さまざまな疑問や悩みへのアドバイスをいただきました。

回答者：東仁美
ひがし・ひとみ

聖学院大学欧米文化学科教授
児童英語教室を主宰するかたわら、長年母親ボランティアとして
小学校英語活動の指導に関わる。小学校英語指導者認定協議会(J-SHINE)理事・
トレーナー検定委員。著書に、『小学校英語 はじめる教科書』(共著/mpi松香フォニックス)など。

Q1 学級担任には どの程度の英語力が 必要になるのでしょうか？

A1 大切なのは、完璧な英語力ではなく 「児童の発話を促すための英語力」です。

東京学芸大学がまとめた小学校教員養成課程の外国語(英語)のコア・カリキュラム(文部科学省委託事業)によると、CEFR B1(英検2級程度)の英語力とされていますが、必要なのは

資格ではなく、「児童の発話を促すことができる英語力」であり、指導にふさわしいコミュニケーション能力です。「聞く・読む・話す・書く」の4技能をバランスよくというよりは、特に話す力が必要になるので、移行期間である2年の間に、子どもやALTとの英語でのやりとりに慣れていくことが大切だと思います。

これから教員をみざす学生は、教員養成課程で、新学習指導要領や新教材から外国語科で扱う表現や語句を確認し、そこから逆算すること



で、「Small Talk」(まとまった話を聞いたり、ペアで自分の考えや気持ちを伝え合ったりすること)の英語、ALTとの打ち合わせの英語、板書の英語など、求められる英語力を「見える化」して学んでいます。

現職の先生方にも、まずは文部科学省が出している移行期間中の年間指導計画案を読み込んでいただき、枠組みと求められていることを理解してから準備を始めていくことをお勧めします。

Q2 「児童の発話を促す」 テクニックはどうやって 学ぶとよいのでしょうか？

A2 文部科学省が現場をサポートする 素材を多数提供していますが、 大切なのは先生が興味をもって 取り組んでいる姿です。

今回の学習指導要領改訂に際し、文部科学省は学校現場をサポートするさまざまな情報提供を行っています。「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」だけでなく、YouTubeの文部科学省チャンネル(mextchannel)にも「クラスルーム・イングリッシュ」「スピーキング・トレーニング」「Small Talk」など、研修に役立つ素材が多数掲載されています。

自治体、教育委員会、各学校での教員研修に参加するのも有意義でしょう。

ただ、テクニックのみを身につけても、なかなか授業の中で生かすことはできません。英語の勉強をしてALTと仲よくなろう、東京オリンピックの語学ボランティアをやってみよう、次の夏休みは海外で英語を使ってみよう……など、英語を通して広がる世界を楽しめる前向きな思いをもって学べば、授業でも生きる力が身につくはず。先生方一人一人が、新しいことに対するチャレンジ精神をもって取り組んでいく姿こそが、「子どもたちの発話を促す」英語力につながるのです。

Q3 学級担任が英語の授業を行う意義は、どんなところにありますか？

A3 学びやすい環境づくり、他教科との連携、評価をするところで生かされます。

『小学校学習指導要領解説 外国語編』では、指導体制について、「学級担任の教師又は外国語を担当する教師が指導計画を作成し、授業を実施するに当たっては、ネイティブ・スピーカーや英語が堪能な地域人材などの協力を得る等、指導体制の充実を図るとともに、指導方法の工夫を行うこと」とされています。

しかし、現在の「外国語活動」では、学級担任が、ネイティブ・スピーカー(ALT)や英語が堪能な地域人材に頼りすぎている例が散見されます。確かに、標準的な英語の音声に接し、やりとりする機会を確保するためには、サポートを得ることは必要です。しかし、児童理解や他教科との連携、さらに教科化により評価が必要になることを考えると、任せるだけでは授業は

成り立ちません。コミュニケーション活動がうまくいく秘訣は、子どもたちが学びやすい環境をつくること、つまり「学級運営」にあります。英語でのコミュニケーションを恐れない雰囲気をつくるためには、児童のことをよく理解している学級担任は、欠かせない存在なのです。

各活動の最初のコールや、振り返りの時間は学級担任が行うなど、少しずつ担任主体の授業になるようにシフトしていきましょう。また、活動の見本を、学級担任がALT等と協力してやってみせることで、チーム・ティーチングの効果も上がります。

Q4 学校としては、どのような研修や準備を行うのがいいでしょうか？

A4 研究授業などを通して、全員で試行錯誤を重ねながら授業研究を繰り返していきましょう。

学級担任がALT等と効果的なチーム・ティーチングの指導を行うためには、学校全体で体制を整える必要があります。

例えば、年間3回の研究授業を設定し、学年ごとに準備をする体制にすれば、教員全員が教材研究への意欲をもつようになります。全員で試行錯誤を重ねながら授業研究を繰り返す中で、新たな発想が生まれることも期待できます。そんな校内研究をぜひ3年間続けてみてください。

できれば、アドバイザーの役割が果たせる日本人指導員(JTE)を自治体で採用し、学級担任のメンター的な存在としていつでも相談ができる環境がつかれるといいですね。

それでは、実際に学校の事例を見てみましょう

